■フォトエッセイ■

カンボジアの農村工業を訪ねて

写真・文　黒岩郁雄
Ikuo Kuroiwa

① 田んぼの中を移動する精米機（プレアシアヌーク州、2015 年 3 月筆者撮影）

●開発途上国の農村工業

開発途上国の農村を訪れて、この村には農業の他にどのような産業があるのだろうか、興味を持ったことのある人も多いはず。そんな折、事業所データを使ってカンボジアの産業集積について調べる機会があった。このような研究では通常都市部にある製造業の集積に関心が集まるが、カンボジアのような途上国の場合、農村工業のプレゼンスも高い。今回のフォト・エッセイでは、筆者がカンボジアで撮影した写真をもとに農村工業の現状と将来について、産業立地の視点から考えてみたい。

●コメ関連産業の立地

カンボジアではコメと関係が深い産業の事業所数が多い。事業所データ（二〇一一年）によると、精米業の事業所が最も多く（一万九四七六社）、コメを原料にした焼酎などを製造する蒸留業も五位（四六〇九社）に付けている。なお、前述の研究では産業集積を特定化するだけではなく、産業集積の空間的分布についても検証している。テクニカルな詳細は省くが、精米業はカンボジアで立地が最も広く分散している産業のひとつである（同様の傾向はタイ、ラオスでもみられる）。

精米業が地理的に分散している理由を説明するのは難しくない。写真①、②をみていただきたい。このユニークな機械は移動式の精米機である。各農家を訪ねて、自家消費に回るコメのみを精米している。このように、主食であるコメは自家消費される割合が高く、しかもコメを生産する地域は全国各地に広がっている。

③ 米焼酎の蒸留装置（カンダール州、2016 年 2 月筆者撮影）

② 農家の軒先で作業する精米機
（プレアシアヌーク州、2015 年 3 月筆者撮影）

④ 食材を包むライスペーパーを作る女性
（バッタンバン州、2016 年 3 月筆者撮影）

コメを原材料とする伝統的な食品加工業も農村でよくみかける。たとえば、前述した蒸留業（写真③）の他に、ライスペーパー（写真④）や製麺業（写真⑤）など多種多様である。なかでも製麺業は、タイやベトナムにおいて、立地が最も広く分散している産業のひとつである。ここでは、筆者が写真⑤の製麺業者（タケオ州）から聴取した同業の立地要因について説明しよう。

最初に原料であるコメはタケオ州、コンポット州など製麺工場の近くから調達されている。麺はコメを水に漬けた後、粉状にする、茹でる、などいくつかの工程を経てできあがる。注目すべきは、麺の需要サイドである。麺は水分を多く含んだ生麺であるため、一日から一・五日しか保存できない。そのため、日持ちしない麺の市場圏は狭く、近隣の人たちを中心に消費されている。

このような状況の下で、全国各地に広がる小規模な精米業や伝統的な食品加工業は、地産地消型の産業として在存（ざいそん）、あるいは発達してきたものと考えられる。

●煉瓦工場の立地

続いて都市郊外でよくみかける煉瓦工場（写真⑥）の立地要因について考えてみよう。カンボジアでは建設投資が盛んで、どこに行っても煉瓦が山積みされている光景をみる。また煉瓦は住宅だけではなく、高層ビルなどにも使われており、煉瓦の市場は人口の多い都市圏を中心に全国各地に広がっている。一方、原材料の調達は工場の立地を決める主要な要因になってい

⑤ コメで作った麺。工場の入り口に売店があり、近所の住民が買っていく（タケオ州、2016 年 2 月筆者撮影）

⑥ トンレサップ河近くの煉瓦工場。煉瓦を焼く炉の前で工員がポーズ（カンダール州、2016 年 3 月筆者撮影）

る。筆者は国道五号線および六号線沿線の煉瓦工場を視察したが、それらはすべて原料の粘土が取れる地域に立地しており、プノンペン近郊ではメコン河およびトンレサップ河の近くに集まっている。また市場アクセスも重要であるため、多くの煉瓦工場は国道の沿線上にある。

確かに、煉瓦工場は上述の食品加工業と比較すると規模も大きく、市場圏も広い。しかしデータをみると、事業所数（粘土製建材と分類されている）は八九五社と一二番目に多く、立地も比較的広いエリアに分散している。これは、カンボジアの伝統的煉瓦工場の低い技術水準や生産規模、製品差別化の程度、製品単価（煉瓦一個一二〇リエル、約三・三円）などを考えれば納得が行くかもしれない。

⑦ トンレサップ湖で捕れた魚の干物（シアムリアップ州、2016 年 3 月筆者撮影）

●市場統合と農村工業の行方

これまで紹介してきた農村工業の多くは、生産規模も小さく、市場圏も限定的であった。他方、今後カンボジアの経済発展とともに輸送・流通網が発達して、農村地域と他地域との間で物流が盛んになるとどうなるであろうか。予想されるのは、他地域、特に近代的な製造業を抱える都市との間で分業が進み、都市は工業製品に特化し、反対に農村では農業や農産物加工業への特化が進むかもしれない。特に、農村では近代的工場で製造された食料品や日用品の消費が増加し、伝統的な農村工業製品の一部を代替していくものと予想される。

しかしながら、無論、すべての農村工業が消えるわけではない。反対に自地域の優位性を活かし、外国を含めた他地域との交易を深めることによって市場圏を拡大する産業が現れよう。最後に、筆者が写真に収めたなかでそのような事例を紹介しよう。

写真⑦は、トンレサップ湖近くの魚工場（シアムリアップ州）である。同工場ではトンレサップ湖で捕れた魚の内臓を処理して干物を作っている。内陸部における水産加工業の立地は川や湖の周辺に限定されており、水産資源の豊富なトンレサップ湖は、ポテンシャルが高く、捕れた魚の一部をタイにまで輸出している。

⑨ ヨーロッパに向けて輸出される米袋（バッタンバン州、2016 年 3 月筆者撮影）

⑧ 大規模な精米施設とそれを見守る作業員
（バッタンバン州、2016 年 3 月筆者撮影）

⑩ 仏像の村の工房で作業する職人
（コンポントム州、2016 年 3 月筆者撮影）

写真⑧は、有名なコメの産地、バッタンバン州にあり、設備投資額が一〇〇〇万ドルを超える大規模精米工場の内部である。カンボジアでは、籾米の多くがタイやベトナムに非公式に輸出されており、それに危機感を感じたカンボジア政府は、国内の精米能力を高めて輸出を増やそうとしている。写真の工場は年間一万八〇〇〇トンの精米をEUや中国に輸出している（写真⑨はEUに輸出されるコメ袋）。

写真⑩は、仏像の製造に特化した村でみた職人の姿である（コンポントム州）。村人によると、一〇年ほど前に一人の職人が始めた仏像づくりがきっかけで急速に発展し、その後外部からも職人が移り住むようになった。興味深いのは、すべての工房が国道六号線のすぐ脇にあり、全国および近隣国の仏像需要に対して迅速に対応できるようになっていることである。

以上のように、急速な近代化が進むカンボジアでは農村工業においてもダイナミックな変化がみられる。もしかすると、このエッセイで紹介した産業や商品の一部も姿を消すかもしれない。しかし同時に、より効率的な産業や魅力的な商品が登場する。よくも悪くもこれが産業発展のダイナミズムでありプロセスである。

くろいわ　いくお／JETRO バンコク事務所　バンコク研究センター

現在、バンコク研究センター（BRC）に勤務して産業集積、自動車のバリューチェーンなどを研究中。